

17世紀フランスにおける植栽技術と庭園

佐々木 邦博

信州大学農学部 造園研究室

序章 17世紀フランスの庭園

17世紀といえば日本では江戸幕府が開かれ、270年にわたる江戸時代が始まる世紀に当たるが、フランスにおいてはルイ14世による絶対王政が始められた世紀として知られている。この王により建設された有名なヴェルサイユ庭園を初めて見る人はその広大さに圧倒されるに違いない。眼前に広々とした花壇が宮殿から西、南、北の3方向に広がり、森が花壇を取り囲んでいる。森は奥の方に深い広がりをもち、さらにその向こうに池や運河が見えるのである。遠方までまっすぐに見える見通し線をペルスペクティブ、日本ではヴィスタと呼んでいるが、この庭園の中心軸である宮殿から西へ延びるヴィスタを眺めるなら、約3 km離れた地平線が遠くに霞んで見え、さらにその先まで庭園の敷地に含まれているのである。この庭園の全面積は現在814haであるが、当時は約1,800haもあり、さらに隣接した北側にも庭園の一部とみなされていたより広大な狩猟林が広がっていた。

このように大規模なヴェルサイユ庭園だが、樹木の植栽に関する資料は若干残っているものの、その技術的側面を伝えている資料はほとんどない。この庭園がつけられた時代における植栽技術を知るためには、当時の造園書を調べるのが最も有効である。ヴェルサイユ庭園に代表される庭の型はフランス幾何学式庭園と称されているが、この型の庭づくりを説明してくれる当時の代表的な書物は「庭づくりの理論と実践」(La théorie et la pratique de jardinage)である。¹⁾ 1709年に出版されたこの本は造園技術を要領よくまとめた本であり、庭好きな貴族や庭師に読まれていたという。14版まで重版されたばかりでなく、英語とオランダ語に翻訳された。著者はアントワーン・ジョゼフ・デザリエ・ダルジャンヴィル(Antoine-Joseph DÉZALLIER D'ARGENVILLE, 1680-1765)と言い、続くルイ15世の時代に財務長官になった貴族である。²⁾ 技術史研究の第一段階として、この書物を利用して、現在あまり知られてはいない当時の植栽技術の有様を探ることを本稿の目的とし、そしてその全般的なレベル、および技術の進展の特徴をなすものを検討していく。

第二章 樹 種

「庭づくりの理論と実践」は4章からなり、その中の第三章が植栽に当てられている。樹木の説明から始まるのだが、まず高木と低木、落葉樹と常緑樹に分類した後、各樹種が説明されている。一般的特徴、使われ方、葉、樹皮、材、根、害虫、繁殖方法、実の利用などの説明がなされており、それを見やすいように一覧表にしたのが表1~4である。他に樹種名だけを記されている場合もあるので、説明されている樹木は代表的なものにすぎない。

表一 落葉高木

樹種	特徴	使われ方	葉	樹皮	材	害虫	繁殖	実の利用	その他
CHÊNE (ナラ)	長期間成長する 直根が長く、風に強い 美しい 高木 まっすぐ伸びる 樹木の王様	森	美しい 木陰によい		最も堅い 建築用材として 優れている	コフキコガネ その他の害虫	播種	どんぐりは豚 の餌になる	
ORME (ニレ)	美しい 長命 まっすぐ伸びる 高木 根が広がる 生長がナラより早い	並木 ボスケ 刈り込み 小庭園、果樹園 菜園のそばには 不適	小さい 密生	少しでこぼこし ている	堅い 筋が多い 軍用材に適し ている	毛虫などの幼 虫	播種 ひこばえ		
YPREAU (ウラジロハコ ヤナギ)	まっすぐ伸びる 生長が早い	並木	大きい ニレの葉より美 しい	つやがある 単色 明るい		コフキコガネ 毛虫	播種 挿し木		
CHÂTIGNIER (クリ)	高木 長命	森林 山	大きい 木陰によい	美しい つやがある	白い 曲げやすい 桶、樽、添木、 たがの製造 腐りにくい	強い	播種	食用 パンにする地 方もある	
TILLEUL (ボダイジュ)	美しい 夏に香りのよい花を つける 倒れやすい 穴ができやすい ゆえに長命ではない	並木 ボスケ 刈り込み	美しい	美しい	白い あまり利用さ れない 樹皮から井戸 の縄をつくる	強い	播種 取り木		
MARRANIER D'INDE (マロニエ)	美しい 高くならない まっすぐ伸びる 早く育つが短命	並木 ボスケにふさわ しくない	美しい	単色	柔らかい 折れやすい 利用されない 新に適さない	コフキコガネ	播種	製粉すると馬 の餌になると いう	
HÊTRE (ブナ)	美しい まっすぐ伸びる	並木 生垣 森林	小さい 美しい つやがある	単色	堅い 建設用材	コフキコガネ 毛虫	播種	食用、ヘーゼ ルナッツノ味 油をとる 飢饉の時には パンをつくる	
CHARME CHARMILLE (クマシデ)	ブナに似る	特に生垣 並木 森林	小さい 美しい つやがある	単色	薪	コフキコガネ 毛虫	播種 根付き が悪い		
ÉRABLE (カエデ)	陰樹 少し幹が曲がる まままあ高くなる	森林の中 生垣	薄い緑 ブナ、アカシデ より美しくない	でこぼこしてい る	堅い 木目が多い 家具、楽器	コフキコガネ	播種		

FRÊNE (西洋トネリコ)	最も良くない	庭園ではまず使われない ポスケの中に使う	とても小さい 薄い緑 葉の量が少ない 尖っている 鋸歯が大きい		単色 節がない 建設用材	ジョウカイボン	播種		樹液と材には ベストを治し たり毒性を予防 する特性がある と言われる
SYCOMORE (イチジク)	生長が早い 短命 まあまあ高くなる	庭園には適さない	大きい	まあまあ美しい	柔らかい 折れやすい 液がでる 利用されない	弱い	播種	果実	
BOULEAU (シラカバ)	あまり良くない まあまあ高くなる 倒れやすい 春一番に葉をつける		とても小さい 木陰にならない	白っぽい でこぼこしている	白い 帯 木靴	強い	播種		樹皮に切れ込みをいれると、顔によい液体がとれる
ACACIA (アカシア)	高くならない 生長が早い 春香りのよい花をつける 倒れやすい 枝に針がある 今は使われない 生長点を切る習慣があり 形がゆがむ	並木 緑のトンネル	とても小さい 葉量が少ない	でこぼこしている	堅い でこぼこしている				
PLATANE (プラタナス)	美しい まっすぐに育つ	暖かい地方に育つのでフランスでは一般的ではない	木陰によい	単色	堅い 白っぽい		播種だが、難しい	油をとる	
AUNE (ハンノキ)	高木 まっすぐに育つ		美しい 大きい	単色 黒っぽい	白い 軽い 建築用材 特に水道管		播種 挿し木 取り木	果実	
PEUPLIER (ポプラ)	高木 まっすぐに育つ		大きい 粘りつく 光沢のある緑	単色 白っぽい	白い 裂けやすい ほとんど用いられない		播種 挿し木		
TREMBLE (ハカヤナギ)	高木 まっすぐに育つ 生長が早い	並木、特に池や運河の周囲に適する	丸い 薄い緑 微風でそよぐ	単色 白っぽい	白い 軽い	強い	播種 取り木		
SAULE (ヤナギ)	高くはならない 最も悪い 穴があきやすい 倒れやすい 短命	小川のそばや沼地に植える	小さい 細長い	醜い	白い 籠竿	強い	挿し木		

注 樹種の所には日本の類似種をあげておいた。以下の表も同様である。

表-2 落葉低木

樹種	特徴	使われ方	葉	樹皮	材	害虫	繁殖	実の利用	その他
ÉPINE BLANCHE (セイヨウサンザシ)	最も良い低木 甘い匂いの花 ナイチンゲールを引 きつける 育ちやすい 鋭い刺がある	生垣	鋸歯 きれいな緑			毛虫	播種		
COUDRIER (ハンパミ)	美しい 枝が多い	ボスケの中 水などを秘密め かして隠すとき に使われる	美しい 大きい		明るい		播種	食用(ヘーゼ ルナッツ)	
MARSAUT (ネコヤナギ)	水辺及び山野に生え る まあまあ高くなる		丸い 明るい緑		白い		播種 取り木		
OSIER (キヌヤナギ)	水辺に生える 高くならない		小さい 細長い		細い 曲げやすい 籠 背負い籠 その他類似品		挿し木 取り木		木工製品は、 この木を切る 機会も多いの で、よい収入 になる

以上の他、樹種だけ上げられているのは次の樹木である。ALISIER (ナナカマド), MIRABOLANIER (?), CORMIER (ナナカマド), CORNOUILLER (ヤマグミ), FIGUIER (イチジク), MÛRIER BLANC (カラヤマクワ), SUREAU (ニワトコ), SANGUINE (ブラッドオレンジ), FUSIN (?), MERISIER (カンカオウトウ), AZEROLIER (地中海地方のサンザシ) である。

表-3 常緑高木

樹種	特徴	使われ方	葉	樹皮	材	害虫	繁殖	実の利用	その他
IF (イチイ)	美しい 刈り込みに強い	生垣 花壇の緑	葉の量が多い 深い緑(目に心地よい)		堅い		播種 取り木	毒だという話 がある	木陰は危険だ という話がある
PICEA (トウヒ)	高木 イチイほど美しくはない	森林の中 四列の並木 一本ずつ植える 場所 現在、花壇には 使われない(大きくなりすぎ、 下枝が上がる)	深い緑 葉量はイチイほど 多くない		堅い		播種		
SAPIN (モミ)	高木(最も高い) まっすぐに育つ	森林(特に丘)	イチイに似ている	白い 軽い 堅い 船のマスト 建設用板材			播種		根から木ター ルビッチが取 れる
PIN (マツ)	高木 まままっすぐに 育つ 上部にだけ枝がある	森林(特に丘)	細い 長い 先が尖っている	赤っぽい 重い	黒っぽい でこぼこして いる		播種		船用のター ルに適する松 脂が取れる
CYPRÉS (イトスギ)	美しい 高木 上から下まで葉が茂 る パリでは生長が遅い	並木 生垣	白っぽい緑 密生	堅い よい香り			播種		
CHESNE VERT (ウバメガシ)	ナラより低い	並木	白っぽい緑				播種		

表-4 常緑高木

樹種	特徴	使われ方	葉	樹皮	材	害虫	繁殖	実の利用	その他
HOUX (セイヨウヒイラギ)	美しい ままあ高くなる		光沢がある(心地よい) 鋸歯刺がいっぱい 色が混じること がある		緑色っぽい 細いしなやかな 棒 鞭		播種	丸い 赤い イトスギに似 ている	
GENEVRIER (ネズ)	ままあ高くなる 香りがよい。		小さい 尖っている		堅い		播種		
PHILERIA (クロウメモドキの一種)	日陰でも育つ	生垣に最適	葉の量が多い オリーブに似て いるが、より短 い 美しい緑 色が混じること がある		黒っぽい		播種 取り木		
SABINE (サビナ)	高く育つ 幹が太い		イトスギに似る		堅い		播種 取り木		
ALATERNE (クロウメモドキ)		生垣	オリーブの葉に 似ている 深い緑 厚い		灰色っぽい		取り木		
BUIS (ツゲ)		庭で最も使われ る 庭で最も必要と される			楡 玉		挿し木 播種		香りが強い
BUIS NAIN		花壇の刺繍 植え込みの緑	テンインカの葉 に似ているが、 より緑で、より 堅い						
BUIS DE BOIS	より高く育つ 日陰で育つ	生垣 林の茂み(叢生 していない所 の方がよい)	より大きい 色が混じること がある		黄色っぽい 堅い 腐りにくい				

詳しい説明の中で最も注目される点は現代ではみられない木材に関する記述である。当初から木材としての利用を念頭において樹木を庭園内に植栽し、木立を形成したかどうかはわからないが、伐採後の木材の利用は十分に考慮されていたことが考えられる。

各項目の記述は適材適所の考え方に基いているが、葉に関してだけは嗜好の多様性を認める現代とは別である。一般的に葉量の多い木が好まれ、しかも大きな葉が好まれる傾向がみられる。

また、樹種を用途別に並べたのが表-5である。美しい並木であるための条件とは、高木であり、幹は通直でなめらかな樹皮を持ち、葉量が豊富なこととある。この時分に流行していたのはマロニエであるが、著者は花と実の匂いを欠点としてあげている。

表-5 用途別に分類された樹種

用途	樹種
並木	<u>ニレ</u> , <u>ウラジロハコヤナギ</u> , <u>ボダイジュ</u> , マロニエ
生垣 (落葉)	<u>クマンデ</u> , ブナ, カエデ
(常緑)	イチイ, <u>ツゲ</u> , クロウメモドキの一種, イトスギ
刈り込み	クマンデ, ボダイジュ, <u>ニレ</u>
林 (高木)	ナラ, ニレ, クリ, ブナ, クマンデ
(低木)	クマンデ, カエデ, ハンバミ, ボダイジュ, セイヨウサンザシ
常緑林 (高木)	イトスギ, モミ, マツ, トウヒ, ソヨゴ
(低木)	イチイ, サビナ, ゲッケイジュ, クロウメモドキ, セイヨウヒイラギ

(アンダーラインは著者が推薦している樹種)

生垣に関しては、苗畑で実生から育てた苗木を移植するのだが、光沢のあるなめらかな樹皮を持ち、しかも根毛が多い木が望まれた。樹皮を並木の場合と同様に気にするのは樹皮が外から見えるような剪定をする場合があったからである。

落葉高木林がほとんどであったフランスの平野部分の森において常緑の森林はまれであったので、珍しさから庭園内に常緑樹の森が意図的につくられる場合があった。その場合は有用性の観点からも考えられており、材の利用と同時に薬用としても考慮されていた。

一部の樹種は今あまりに使われないが、全体として把握するなら、現在伝統的とみなされて使われている樹種がそろっているといえる。

第三章 植栽の方法

「庭づくりの理論と実践」には、花壇、並木、生垣、門と柱列、アーケード、剪定、肥料、ボスケの項目別に植栽の方法は記され、最後に移植時期の説明がある。いろいろな技術の必要性和有効性が積み重ねられた経験により判断されていることがわかる。

フランス式庭園内につくられる花壇ではツゲとイチイがよく使われる樹木である。ツゲは列状に植栽され、イチイは一定の間隔のもとに植えられる。ツゲは根毛の先を切った後に

0.5ピエ (pied, ピエは当時のフランスで通用していた長さの単位。1ピエ=0.324m) の深さの植え穴に植えられる。イチイの植え穴の大きさは2ピエ四方で、深さも2ピエであり、底には良質の土を、その上には腐植土と良質の土を混ぜ合わせた土を入れなければならないという。根土についてだが、この時期にやっと根土をつけたまま籠に入れて運び、移植する技術が普及し始めており、ツゲとイチイは苗畑で育成されていたと考えられる。

並木に関しては、一般に12ピエ (約3.9m) の間隔をもたせて配置し、それぞれ4ピエ四方で深さ3ピエの植え穴を掘り、底に1ピエほど表層土か良質の土を入れる。木を移植する前に8~9ピエの高さに上部を切り落としてそろえ、また傷んだ根を切り落とす。最後に土をかぶせ、踏み固め、翌日水ぎめをする。

生垣では、まず深さ1ピエの溝をはる。片面を垂直にまっすぐ掘りさげ、6~7ピエの高さのクマンデなどを2~3ピエの間隔をとりながら垂直面に立てかけ、木が垂直かどうか確認してから埋め戻し、踏み固める。生垣を美しく、しかも長く保つには風通しが良い場所に作らねばならない。生垣の上に樹木がある場合には樹木の下枝を払い、生垣の高さを10~12ピエにそろえる。また、並木の下に作る時には通風のために背後に6~7ピエの空地を用意する。しかしこの場合には10年ぐらい後に枯死することが多いので、むしろ並木から6~7ピエほど離れたところに作ることが薦められている。通風の条件を重要視しているのは、おそらく害虫の対策ではないかと思われる。

フランス式庭園には樹木の刈り込みにより門や柱列、アーケードが作られる場合が多い。門や柱列などには、枝が多く、しかも下枝がついているニレが適している。移植後、目的の形をなすよう剪定していく。台石を形作る場合にはクマンデかニレの若木を傍らに植え、柱頭より上の部分は枝を引き寄せて形を作る。アーケードの場合も同様だが、植えた若木がしっかりと根付くまで格子などで支え、枝を張り付けて形をつくらなければならない。

これらの剪定にはふつう鋏を使うが、高い所は鉋鎌や小鉋鎌を使用する。丸みを帯びた箇所は同寸大に作った木枠を利用し、それに合わせて刈り込む。クマンデだけを植える場合は密植する。木を曲げたい時には移植から2~3年後に根付くのを待ってから曲げる。これらのことから、このような形を作るにはそうとう長い年月が必要とされたことがわかる。

肥料に関する記述は次の通りである。植え穴には堆肥を入れず、葉や芝などを入れる。また、夏には暑さから根本を守るために堆肥を0.5ピエの厚さで広げる。散水するたびに根に養分を与えることになる。現在行なわれているマルチングと同様のことである。

フランス式庭園の内部に作られた森はボスケ (bosquet) と呼ばれるが、6種類の形がある。それは大木のボスケ、雑木林のボスケ、生垣のある中高木のボスケ、仕切り模様のボスケ、五の目植栽のボスケ、常緑樹のボスケである。³⁾ 代表的な例として3例を取り上げる。まず大木のボスケであるが、掘り起こした後いろいろな種の種子を蒔く。あるいは鋤によりつけられた跡に従い、6ピエごとに種子を差し込む。早く育つことと規則的な配置の空間が形成されることから著者は後者の方法が良いとしているが、最も良い方法は若木の移植だと述べている。雑木林のボスケも同様の方法を用いるが、違いは樹木の間隔を3ピエと短くすることと、枝を広げさせ、茂みを形成するために若木の時に成長点を切ることである。このボスケは7~9年ごとに小さな木だけを残して伐採されるので、籬林とも呼ばれる。生垣のある中高木のボスケの場合はまず林内に園路を決め、そこにそって生垣を作り、内部に樹林

を作る。6ピエの間隔に溝を掘り、そこに3ピエごとに木を植える。その後、溝と溝の間に種子を蒔いたり、突き刺す。移植された木は手入れされて大木となり、実生による木は藪を構成する。より早く森を作るために著者は取り木を薦めている。他のボスケも同様の方法で植栽される。

植栽時期に関しての記述だが、11月から12月にかけてがふさわしい時期とされる。そして気候条件の違いによる地方差の指摘もある。フランス南部の地中海式気候の地域においては雨が降る冬期以前に植えることを推奨しているし、北部の湿った地方においては冬の湿気から解放される5月を薦めている。

以上の記述を通してみると共通する事柄、当時の庭園造りの特徴がいくつか見受けられる。その一つは、上記の説明には取り上げなかったが、補植の指示がかなり多いことである。花壇においては翌年にツゲとイチイの補植を指示する記述があるし、花壇以外の場合も同様である。これは活着率が低く、枯れたり、芽の出ない場合が多かった事実を反映している。ヴェルサイユ庭園において多くの大木を移植したときに約4本中3本が枯死したこともあった程である。⁴⁾ この活着率の低さを改善するための方策として、著者は根土をつけたまま移植する技術をあげている。当時は根土をはらって移植するのが一般的であり、大木は山どりされ、そのまま馬車で運び込まれていた。よって籠を用いて根土とともに運び、植え込む技術が有効なゆえに、普及し始めていたのである。

次に目につくのは土壌の劣悪さである。土壌条件の悪い場合の記述が多い。それは主として排水のよくない粘土状の土を指している。ヴェルサイユなどの低湿地がそのような土壌であったし、低湿地を池として利用した多くの庭園も同様だったと推定される。対策として書かれていることは植え穴をより深く掘り、良質の土を入れることである。

最後に上げられる点は庭園の形ができあがるまでの期間の長さである。ボスケを形作るために若木を植えたり種子を蒔いたり土に差し込んだりすること、様々な形の刈り込みを作り上げるのに刈り込みながら樹木の生長を待たねばならないことなどはそれらの完成までにまづ10年ぐらいの期間をみていたと考えられる。ゆえに、作りたての庭園は小さな樹木が多かったろうと思われる。この長い期間を短縮するために大木の移植が試みられたり、著者により若木の移植が薦められているのであり、それに伴う活着率を上げる技術が求められていたのである。つまりこの時期は技術向上のための模索の時期であったことがうかがい知れるのである。

第四章 植栽後の維持管理

維持管理の作業は土起こし、水まき、樹木の手入れの3種類の作業からなる。

土起こしは年に4回行なわれるが、大規模に行なうのは年に2回であり、初冬と春に行なわれる。軽い土では9～10プス (pouce, 1ピエ=12プス, 1プス=0.027m) の深さまで掘り起こし、湿った土では6プス掘り起こす。その他の2回は二度鋤きと呼ばれる浅いもので、いわば草取りであり、夏に行なわれる。単木の場合は周囲4ピエ四方を掘り起こし、生垣においては背後を2ピエの幅で掘り起こすが、園路沿いの場合は園路側を掘り起こす。また土の性格によりその時期が変わる。軽くて乾いた土の場合、暑さをやわらげるために雨前か雨

後に行ない、湿った粘土質の土の場合は熱を必要とするので暖かい時に掘り起こさねばならない。

水まきの記述の内容は現在と変わるものではない。若木には常に水を豊富に与えなければならぬ。水まきにふさわしい時間は朝と夕方である。日中は林内や木陰になった場所に水をまく。また、家畜の敷きわらを広げて樹木の根本を被い、その上から水をまくとモルタル状の土ができないし、土の涼気を保護すると著者は述べている。園路では美観上この敷きわらを地面すれすれに敷き込み、その上に砂をかぶせるが、これは樹木にとっても役に立つことである。館から近い所の樹木にはじょうろで水をやるが、遠い所へは樽に水をいれ、手押し車に乗せて運び、木の周囲を凹地状にしてから水を入れる。また、木製の長い樋やセメントで固められた溝を作り、水を遠くまで流すが、この方法は主として菜園で使われる。生垣では生垣に沿って溝を掘り、水を流す。

樹木の手入れとは若木を仕立て、枝を払うことである。高木が美しい条件を満たすためには一本の幹が二股もなくまっすぐ上に生長していかなければならない。生長点が切りとられている場合には最も垂直に近い枝を選び、他の枝を切り落とす。幹に小さな屈曲部があったなら小鉋鎌の先で屈曲した場所に沿って割れ目を入れる。2～3年後に凹みがなくなり、太くなるにつれて消えてしまうという。並木には支柱を立てる。風により吹き倒されたり、頂部が曲がりくねったり分枝しないようである。吹き倒されたり曲がりくねった木を使う場合には、ロープで木がまっすぐになるように引っ張った後に、付近の木を利用して太い針金で固定し、強制する。さらにひどい場合には横木を使い、付近にある木と一緒に固定し支える。それでも強制できない場合には切り倒し、新たに若木を植える。生垣などに行なう剪定は発芽後2年たってから始め、両側を刈り込み、なるべく薄く仕立てる。樹木がまっすぐに上に伸び、また、木と木の間が空かないようにするためである。生長点を切るのは予定の高さに達した後である。また樹木が20～30ピエの高さに到った時にも下枝が枯れ上がらないように木を同じ高さにそろえて生長点を切る。6月と9月初めに脚立や移動台を使って剪定するのがよいが、実際には7月に一度行なわれることが多い。花壇で用いられる低木は常に形を維持するために年に2～3度剪定される。

以上のことから当時の様子がありありとわかるのだが、全体を俯瞰する中でいくつかの特徴がみられる。まず行なわれるべき技術の理由の説明において当時の自然科学のレベルでできる限り合理的に述べようと試みられていることがわかる。例えば、当時はリターが分解して土の養分となるのが理解されてはいなかったが、表層土が養分に富んでいる事実を経験的に知っていた。このことを説明するために大気中の塩（養分の抽象的な表現か？）が降下し蓄積されるからというような説明を加えている。このように技術が成り立つ理由をなるべく合理的に説こうとする姿勢はこの書物全体に通じる特徴である。読者は読了後ある程度納得したに違いないし、また著者はそれだけの理解力をもった読者を想定していたに違いない。

同時に、蓄積された経験を合理的な説明により体系付けようとしていることがあきらかである。このような試みが行なわれること自体が、この時期に到るまでの積み重ねの大きさを語るものなのである。

次に土起こしについてだが、現在ではまれに行なわれているにすぎない。土起こしを定期的に行なわなければならない理由は主として土の劣悪さに起因している。その目的は土の中

に空気を入れ、団粒構造を作ることであり、養分が維持され、排水が適切に行なわれるようである。今あまり行なわれていない理由は手間がかかりすぎる上に、土壌改良剤が普及し、またおおがかりな客土を行なうこともできるからである。

最後に樹木の手入れが整形外科的なことが上げられる。現在のように苗木が豊富に供給されているわけでもなく、移植技術が十分ではなかった中で、曲がった木をまっすぐに、またまっすぐな木を刈り込まねばならない場合が多かった。当時の美意識にしたがって強引に木を仕立て上げることがそのような手入れを生み出すのである。これは、いわばフランス式庭園にとって避けられないことであった。また、枝の手入れ、樹林の手入れは、果樹の栽培技術、林業の技術と密接に関連していると思われるが、現在の所不明である。

第五章 総合考察

このように樹種、植栽の方法、植栽後の維持管理と当時行なわれていた技術を見てきた。そこでこれらを総括すると当時の技術のレベルが推し量れる。それはヴェルサイユ庭園のような広大な庭園を作り出すにはあまりに人手が必要であり、広大さに対応していないものだという点である。フランス式庭園はじょじょに確立してきた様式ではなく、1660年前後に相次いで建設されたヴォー・ル・ヴィコント庭園とヴェルサイユ庭園により一挙に成立した様式であった。それ以前の小規模や中規模の庭園造りから突然比類ない巨大な庭園造りが行なわれたのであり、すべては旧来の方法で対処しなければならなかった。つまり、ただ人手をかけることにより対応したわけであり、例えば、その結果として、その広大さゆえに多くの枯死した樹木が目立ち、補植の指示が多いのである。このような広大な庭園を作るにはあまりに確実性に欠ける技術レベルであり、1709年頃においても対応したものには到っていなかった。庭園の様式は完成していてもそれを作り上げる技術はふさわしいものとはならない。技術においてはより効果的なレベルを確立し、移行して行くまでの過渡期であったのである。

次にこれらの技術の内容から当時の庭園や庭造りに関して明らかになったことが3点ある。まず庭園の形の完成という点である。記述内容からみる限り、庭園に植えられた植物が森や生垣の形を整えるには実生から育てる場合などを考慮すると最低10年はかかるのではないかと思われる。このことからヴェルサイユ庭園においては大木の移植が試みられるのだが、大量枯死という結果に終わっている。さて、現存している庭園を訪ねると当時の庭園を描いた絵画が残されている場合が多いが、それらの中に見られる庭の植物はどれも立派なものである。しかし実際は、特に作りたての庭園の場合、枯死した樹木の場所が空いていたり、若木が目立ったりし、生垣にいたってはまだ形作られてさえいなかったことが当時の技術により推測される。絵画のような理想化された形態となるまでにはかなりの年月を必要としたことがわかるのであり、その期間を短絡するための技術が求められ、試みられていたのである。

次に庭園造りに関して最大の障害は土壌の劣悪さであった点があげられる。ヴェルサイユ庭園においても低湿地には池を造り排水を良くして樹木の生育条件を改良しようとした。その結果徐々に良くなって行っている。この本の各所に書かれている劣悪な土への対策も積み重ねられてきた様々な改良の試みを基にして考えられてきたのであり、特に重点がおかれて

いた。

最後に、伐採された樹木が材として利用されていたと考えられることがあげられる。当時の主な燃料は木であったことを考えると、枝打ちなどにより切られた太い枝はおそらく薪として利用されていたであろうし、伐採された樹木は利用されないと考える方がむしろ不自然なのである。どの程度まで材としての利用を考えて樹種が選択されていたかが問題となるが、この点は明らかではない。しかし庭園が広大であり、苗畑まで敷地内に作っていたことから考えると木材利用を考えた森造りが広範囲にわたって行なわれていたのではないかと推定される。そして当時の林業技術との深い交流が推し量れるのである。

このように考察を進めてきたが、なお不明なことも多く、明らかになったことにおいてもまた新たな疑問が生じるといった具合で、この論文は研究の第一歩を記したにすぎない。今後このテーマを継続し、技術史研究を進めて行きたい。

補 注

- 1) 第一章は庭の概論、第二章は測量と整地、第四章は水の利用のための技術に当てられている。なお、第四章は1747年に第四版が出版されたときに新たに加えられている。
- 2) 彼は博物学者でもあり、美術史家でもあった。主な著書に「博物学」(Hitoire naturelle, 1757), 「名画家の生涯」(Aubrégé de la vie des plus fameux peintres, 1745-52)がある。また、子供にアントワヌ・ニコラ・デザリエ・ダルジャンヴィル (Antoine-Nicolas DÉZALLIER D'ARGENVILLE, ? -1796) がいるが、彼もまた「庭づくりの手引き」(Dictionnaire du Jardinage) を1767年に出版している。
- 3) 信州大学森林科学科編, 「森林科学への道」, 諏訪文化会館出版部, 1989, pp. 177-190 佐々木邦博「庭園の中の森」参照
- 4) Alfred et Jeanne Marie, "Versailles au temps du Louis XIV-vol. III", Imprimerie nationale, 1976, p. 331

**Techniques de la plantation et des soins des arbres et le jardin
en France aux XVII siècle**

Kunihiro SASAKI

Laboratoire du paysage, Faculté d'agriculture, Université de Shinshû

Le but de cet étude est de clarifier les techniques de la plantation et des soins des arbres en France aux XVII siècle, où on a réalisé beaucoup de jardins français que le jardin et le parc de Versailles représente. Pour ce but, j'ai analysé "La théorie et la pratique de jardinage", livre représentatif du jardinage à cette époque écrit pour réaliser ce type de jardin.

Il en résulte que le niveau des techniques ne s'adapte pas à la réalisation du grand jardin et du parc comme ceux de Versailles, et donc beaucoup de main d'oeuvre supplée des points faibles bien qu'il soit insuffisante seulement elle. Ce niveau des techniques est celui de la période transitoire au niveau plus développé.

En plus, trois grands traits dominants sont découverts.

- 1) Attitude à l'égard de ces techniques. L'auteur a pris une attitude scientifique pour les expliquer et les systématiser. Cela même explique que les techniques du jardinage se sont assez développées par les expériences multipliées.
- 2) Des années pour perfectionner la forme du jardin. C'est parce que les arbres plantés étaient si morts qu'il se trouve partout dans ce livre les articles qui indiquent la plantation supplémentaire, et parce qu'il faut attendre longtemps pour que les jeunes arbres forment le bois, la palissade, ...
- 3) Problème du sol de mauvaise qualité. Comme c'est le plus grand obstacle pour le jardin, il y a beaucoup d'articles sur ce problème. Aujourd'hui, on peut utiliser l'amendement ou apporter le sol de bonne qualité en grande quantité pour prendre des mesures contre ce problème. Cependant, ces façons étaient impossibles à cette époque et, par conséquent, il était très embarrassant sans façon d'effet immédiat.